

埋蔵文化財

一五八五年（天正十三）の造立銘を有する杵島郡有明町稻佐神社のものを最古とし、江戸時代初期に数多く造立され、延宝年間（一六七三〜八一）ころから著しくその数は減っている。香椎神社の肥前鳥居の造立銘は一六〇六年（慶長十一）龍造寺政家が一門の安泰を祈願して建立している。一六〇三年（慶長八）造立の佐賀市与賀神社三の鳥居の肥前鳥居は国の重要文化財である。

最近、住宅地の開発が進み、地下に眠っていた埋蔵文化財の発掘が進められているが、今まで未知の世界に調査の鍬が入れられている。この事は、やがて古き良き時代の久保田の祖先の姿を学ぶ資料として、町民の前に展示されることであろう。

上恒安遺跡発掘調査

久保田町教育委員会では、大字徳万字上恒安において、宅地開発に伴う埋蔵文化財発掘調査を実施した。県文化財課に専門職員の派遣を依頼し、開発面積二、〇〇〇平方メートル、調査対象六〇〇平方メートル、平成十三年五月八日〜六月十六日迄実施。町内在住作業員延べ二六八人。

調査結果、古墳時代、平安時代、中世（鎌倉時代）、近世（江戸時代）を主体とした遺跡であることが分かった。遺構としては、掘立柱建物跡、井戸跡、溝跡等が発見された。かめ・壺・皿などの土器類や曲物等の木製品をはじめ多くの遺物が出土した。

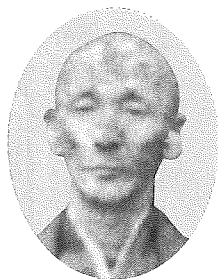


埋蔵文化財発掘調査（上恒安）

九 久保田町の人物

村田若狭

文化十一年〜明治六年（一八一四〜一八七三） 政治家



久保田邑主。龍造寺政家の後裔。名は政矩、慶吉郎、「西麒麟」と号す。

深堀邑主鍋島孫六郎の二男で村田家を継ぐ。表高一万三〇八〇石、物成四三〇〇石を有す。家督を相続直後、邑地の海面を干拓して良田となし、大に民力の扶植に努めた。藩主鍋島直正及び直大の信任を得て常に家士を長崎に遊学させ蘭学を修めさせ郷校を再興し、西洋文物の普及を図った。文久年間には幕府の蘭医ボードインを招き長崎に病院を建てた。種痘を奨励し、銃砲製造場を創設。蒸気船の模型を作り嘉瀬川に浮かべる等科学的研究に熱心であった。明治の初め佐賀藩の執政となり、封土奉還の議を主張廃藩置県に功あり。プロテスタントのキリスト教を信仰し、諸藩の重職にして受洗のさきがけとなった。幕府の命により、長崎警備のため藩から度々出向、同地滞在のフルベッキに英語を学び、家臣が港で拾った英書に興味を覚え読み始めた。従来それは『聖書』であったとされるが、伝道用のトラクトであり、フルベッキは改めて『聖書』を与えて指導すること四年、慶応二年四月六日（一八六六年五月二十日）弟綾部とともに受洗した。

藩主鍋島直大も好意を寄せ、棄教させることなく彼を引退させた。その後久保田村に隠棲、漢訳『聖書』の邦

訳に励んだ。グリフィスのフルベッキ伝によると、彼は日本伝道は日本人によるべきであると、二青年をフルベッキに託し、将来のキリスト教の発展を祈り、微笑しつつ没したという。大正四年十一月、正五位を追贈された。墓は元小路の大雲寺にある。享年五九歳

江口六蔵

文政六年〜明治二十三年（一八三三〜一八九〇） 政治家

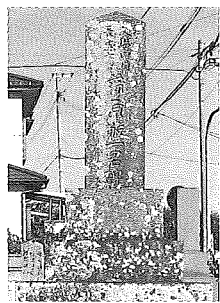


久保田町の快方に生まれ、思齋館に学びのち同館の都検を勤める。快万寺子屋を経営、庶民教育に尽力した。明治十一年（一八七八）長崎県管轄下の頃、佐賀郡選出の長崎県議会の議員となる。明治十二年長崎県臨時県議会で副議長となる。（議長は小城郡選出の松田正久）明治十三年七月県議会議員を辞任、同年同月二代目杵島郡郡長に就任。明治十六年五月九日、佐賀県が長崎県の管轄から独立し佐賀県議会が発足すると、同年七月から翌年四月まで佐賀県議会議員に選ばれた。

明治十五年二月には九州民憲党委員。同年五月、九州改進黨肥前部会の本部常任委員および規則審議会の議長に推された。明治二十二年（一八八九）四月、町村制施行により久保田、徳万、新田、久富の四カ村が合併して久保田村を設置、江口六蔵が久保田村初代村長となった。墓碑は上恒安の龍顔寺内にある。享年六九歳

蒲原敬一

弘化二年〜明治四十四年（一八四五〜一九二二） 官吏・政治家

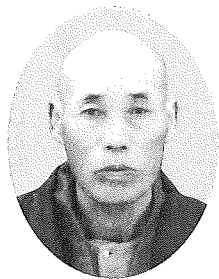


久保田村久保田宿の石川又蔵の二男として、出生。蒲原佐内の養子となる。

明治二十年（一八八七）二月、沖繩県の司獄官となる。能吏として重く認められ、しばしば賞賜を受けている。明治三十五年（一九〇二）五月、官を辞して帰郷し、第一〇代久保田村長に就任。激しかった政争を良く取りまとめ、久保田村を和楽の地となし、村財政を建てなおすなど大きな業績を果たす。大正元年（一九一二）十月、その功績を称え碑が建立された。撰文は、貴族院議員の峰榮太郎。碑と墓は久保田町上恒安の龍顔寺内にある。勲七等 享年六六歳

大島定吉

安政三年〜昭和十七年（一八五六〜一九四二） 政治家



久保田村搦の大島龍七の三男として出生。学才には乏しかったが機智に富み、喧嘩太郎で有名だった。押し強きには定評があり、議論をして人に譲ることはなく、頭の閃きが早く、その才覚他に類例なし、反骨精神で村会議員は勿論、佐賀郡会議員まで掌中にした。村内の政党は石川又八を初め政友会優勢な中で、大島は一人憲政会で活躍した。昭和九年佐賀板紙株式会社の流す悪水問題が、漁民との間でよう

やく解決した時、大島は会社と村当局が結んだ和解契約を不満として裁判所に提訴した。会社・弁護士、本人・弁護士。それに県の調査・調停と様々な動きがあつたが解決に至らず、結局は当時の漁業組合長高森豊吉の調停で、大島もこの訴訟を取り下げた。蓄財に長じ、その財源は有明海であつた。魚漁が得意でアゲマキで大儲けをし「アゲマキ定」のあだ名もあつた。カキを養殖加工し、中国の上海まで輸出し巨額の富を貯えた。晩年は、大正八年（一九一九）四月、久保田塗料製造株式会社を創設、同村新田に工場を建て、カキ殻を粉碎し塗料を製造した。社長に大島定吉、取締役中に島松二郎・古賀醸一郎が就任した。享年八六歳

本野の一郎

文久二年〜大正七年（一八六二〜一九一八） 官吏



久保田の小路出身、本野盛亨の長男。フランスのリヨン大学に学び、帰国後外務省に入り翻訳官、参事官、政務局長心得、公使館書記官等を歴任。この間、明治二十六年には、法学博士の学位を獲得している。明治三十一年には特命全権公使となりベルギー、フランス、ロシアに派遣される。日露戦役前後の困難な外交交渉に功績をあげた。同四十一年には全権大使となり再びロシアに在勤、日露協商条約を締結した。大正五年寺内内閣が成立すると請われて外務大臣となり、第一次世界大戦の難局をよく処理した。一郎は性寡黙、直情径行の人。しかし外交官らしく多趣味で、謡曲、ビリヤード、碁、将棋、写真、書、絵、彫刻などに堪能であつた。読売新聞社初代社主。子爵、従二位勲一等旭日桐花大綬章を贈らる。享年五六歳

石川又八

明治十年〜昭和十年（一八七七〜一九三五） 政治家



久保田村久保田宿、石川謙助の長男として出生。大阪市立高等商業学校卒業。明治三十六年頃、農業改良に熱意を傾注し、正条田植奨励のリーダーとして活躍。村内の篤農家を中心に晩生稲一本化の時代を力説、大正二年の全国五石收穫懸賞会でその成果が認められ入賞した。同年九月二代久保田村長に就任。佐賀郡会議員に連続当選、大正三年十月郡会議長となる。佐賀県議会議員二回当選。同七年、昭和七年佐賀県選出衆議院議員に二回当選。国政の場でも活躍した。日露戦争に従軍、功により従七位勲五等功五級、陸軍歩兵中尉。農業を営み、佐賀県農工銀行取締役。その他、古賀銀行・窓乃梅酒造株式会社取締役。日宇土地株式会社・田中丸呉服店監査役を兼任、実業界の重責を担った。昭和二年、大立野の魚問屋を株式会社石川魚市場に改組。同三年、久保田墾耕地整理組合、初代組合長となり、面積二二八町の干拓工事に尽力した。西肥板紙株式会社の創立発起人の一人である。墓・頌徳碑は久保田町小路の妙鎮寺の境内にある。書は鳩山一郎、撰文は学習院教授太田保一郎。享年五八歳

市川 潔

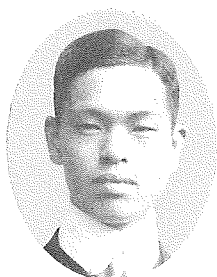
明治十三年～昭和二十五年（一八八〇～一九五〇）政治家



久保田村小路にて、市川太兵衛の二男として出生。もと古賀の住人で、龍造寺の子孫といわれている。現在の姓は旧藩政時代より使用してきたものといわれている。祖父伊兵衛は戸長役場当時の筆生用掛として勤め、父太兵衛も行政に関与していた。本人は郡役所の書記として四年勤め、その後、東邦電力佐賀支店の営業課長として腕をふるう。ついで松島炭坑の用度課長などを歴任し、県下炭山の開発者として名を知られていた。その外、郵便局長、信用組合監事、漁業組合理事長、消防組頭、協会代議員等その功績は汎に亘る。大正九年（一九二〇）二月、一五代村長に就任。基幹産業である農業の振興に力をいれ、当時としては画期的な事業であった、電力による機械灌漑の方式を取り入れ、全村に設置し農民の水利の便を図り、農業の合理化・近代化を一步前進させた功績は誠に大であった。昭和三年（一九二八）十二月、人格識見を認められ、一七代村長に再就任する。その間、教育の機会均等・村民の融和を図るため上・下二校の小学校を合併した。村長のほか久保田駅の商品運送会社社長、久保田自動車商会代表社員などを勤めた。享年七〇歳

御厨 栄

明治十五年～明治四十年（一八八二～一九〇七）官吏



久保田村上新ヶ江、御厨卯兵衛の四男として出生。明治三十三年県立佐賀中学校（現佐賀西高校）を卒業。刻苦勉励し、翌年外務留学生試験に合格、オランダ留学を命ぜられ、横浜港より日本郵船の若狭丸にて渡航、着任地ハーグに到着。語学習得のためハーグの中学教師にオランダ語の文法・作文・会話を学ぶ。退役陸軍大尉方に止宿、朝夕夫妻の語学指導も受け語学の習得に励んだ。明治三十九年オランダ国在勤の外務書記生に任命される。翌年、第二回万国平和会議委員付きに任命される。同年六月よりハーグにおいて都筑馨六全権大使の下で翻訳に従事、苛酷なまでに多忙な日々であった。同年十月、肺結核のためブローノヴォ病院に入院、外務省・大使館の手厚い配慮にもかかわらず容態は悪化十二月六日同病院にて死去。ハーグ市内の墓地に埋葬。第二回万国平和会議の功労が認められ、勲八等瑞宝章に叙せられる。享年二四歳

御厨卯兵衛の三男袈裟一は、明治二十八年県立佐賀中学校を卒業、熊本高等学校を経て東京工科大学に入学、電気工学科を卒業した工学士である。長崎電灯会社で実習し、傍ら背振の山を跋涉し広瀧川の水力を研究し、水力電気事業の設計をし卒業論文とした。その雄大にして緻密な理論・構想は多くの人々に示唆を与えたと思われる。その才能を将来に輝かす事無くこの世を去った。享年二七歳 兄弟の墓碑は上新ヶ江桂秀院の墓地にある。

下平多作

明治二十年～昭和四十三年（一八八七～一九六八）政治家・獣医師



杵島郡朝日村大字中野字川上、下平作一の二男として出生、小学校卒業後は県立佐賀農学校に進学。牛馬等の家畜に興味を持ち、更に大分県立農学校獣医学科に学び、一段と向学心に燃え東京帝国大学農学部獣医学講習科に入学、研鑽を重ねる。卒業後久保田町徳方において獣医師を開業。昭和二十年佐賀郡市畜産組合を創立、組合長に就任。推されて佐賀県畜産組合連合会会長の要職に就き優れた手腕を発揮した。この他、県種牝馬組合長・県獣医師会長・県装蹄師会長・県鉄鋼製品工業組合理事長等を歴任。農業との関わりが多く県農地委員、県農業委員協議会会長、県農業保険審査会委員等、二〇余の公職を兼任し奔走した。

昭和二十二年、第一回村議会議員の公選に出馬し当選。昭和二十四年、芦刈村外五カ町村（小城町・三日月村・川上村・久保田村・南山村）で、競馬組合を設置したが、下平議長はその役員として活躍、ジュデイス台風後に復興競馬を開催、多額の収益をあげ災害地の復興に貢献した。昭和二十六年の第二回公選にも当選、人柄と識見を認められ議長に推挙され、爾後三期一二年間議長を務める。その間に県町村議長会会長としても活躍した。その功績が認められ、昭和三十五年黄綬褒賞、昭和四十二年勲五等旭日双光章に輝いた。享年八四歳

高森豊吉

明治二十三年～昭和五十九年（一八九〇～一九八四）政治家

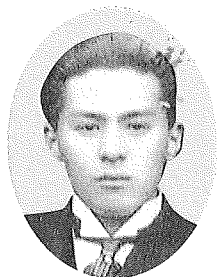


久保田町上恒安に於いて、高森和三郎の長男として出生。謹言実直、人の意見に耳を傾ける人で、若い頃は税務署に勤務、後役場職員となり、その手腕が認められ収入役・助役と昇進し、昭和七年（一九三二）一月、一九代久保田村長に就任。戦時体制下で苦難に満ちた村政を担い、終戦に至るまでの一四年間、ひたすら村民の健康・安全を願い、国への協力にも余念がなかった。昭和二十年（一九四五）八月十五日、太平洋戦争終決後は失意にせず村民を激励し、食料の確保・物資補充等困難な業務に追われた。進駐軍の占領政策により公職を辞した。その間、昭和七年には石川又八・古賀銀三郎・中島松二郎等と久保田棚耕地整理組合を設立。有明海に面した広大な沃野の造成に着手し干拓事業の先駆けをした。しかし、一部漁業者に干拓反対の声があがり、高森村長は新漁業組合を設立、組合長をつとめて反対の有明海漁業連合会の干拓承認を得た。

太平洋戦争末期、物資欠乏の時代の対応が認められ、高森は帝国耕地協会、農林大臣等から数度にわたり表彰を受けた。久保田棚耕地整理組合三代組合長として干拓事業に活躍した。晩年は町の歴史の調査研究に情熱を燃やし、町史編纂委員長として四年の歳月を経て、昭和四十六年（一九七二）十月、『久保田町史』が発行された。享年九四歳

村田隆長

明治三十二年～昭和四十三年（一八九九～一九六八） 政治家



久保田邑主の末裔、父虎吉郎の二男として久保田村徳万にて出生。東京高千穂中学校卒、明治大学法科予科二年終了後、大正十五年（一九二六）二月、佐賀百六銀行取締役に就任。戸上電気顧問、秋田製鋼次長等を歴任。昭和二十一年（一九四六）四月、二〇代久保田村長に就任、翌年公選で同村長に当選した。昭和二十六年四月再選、その後昭和四十二年（一九六七）三月まで、二〇年間の長きに亘り村長を勤め、同年四月町制施行により、四月一カ月間初代町長に就任した。

その間、終戦後の占領軍対策に奔走し、村民の精神的な動揺を鎮め、物資欠乏の時代を食料増産運動で、村民の奮起を促した。昭和二十四年の大水害では、村をあげての復旧事業に奔走し、特に嘉瀬川改修工事の必要性を県や国に陳情工事の完成に尽力した。昭和三十二年には久保田村新田に役場の新庁舎を建設。思斉小学校の校舎建築も推進した。村長としての永年の功績が認められ、昭和四十一年一月全国町村会会長の表彰を受ける。昭和四十三年一月、地方自治施行二〇周年記念知事表彰を受彰した。家庭裁判所参与兼調停員、佐賀簡易裁判所司法委員も兼ね、同所功労賞を授与される。菩提寺は元小路の大雲寺である。享年六八歳

古賀了

明治三十七年～平成九年（一九〇四～一九九七） 政治家



久保田村久富において、古賀銀三郎の長男として出生。大正六年（一九一七）久保田村立新田尋常小学校卒業、旧制佐賀県立佐賀中学校入学。大正十年（一九二二）佐賀中学校四年修了、佐賀高等学校入学。大正十三年（一九二四）佐賀高等学校卒業、東京帝国大学（経済学部）入学。昭和三年同校卒業、久留米歩兵第四八連隊入隊。翌年除隊、農業に従事する。同七年佐賀県立佐賀図書館に勤務。この間、国際情勢は緊迫し満州事変・上海事変が勃発、同十年佐賀信用販売利用組合連合会勤務。同十二年支那事変勃発、久留米歩兵第四八連隊応召、召集解除後の同十五年上海毎日新聞入社。翌年退社、株式会社丸善石油入社上海支店に勤務したのは昭和十六年、日本が太平洋戦争に突入した年であった。昭和二十年（一九四五）太平洋戦争終結。大陸雄飛の夢は消え、上海を引き上げ郷里久保田に帰り、食糧難と物資欠乏の厳しい中で農業に従事し、日本の将来について深く考えるところがあった。

昭和二十二年久保田村農業会資産処理委員長・久保田村農協設立発起人代表就任。同二十三年久保田村農業協同組合初代組合長就任。昭和二十六年（一九五二）推されて佐賀県経済連会長、同年佐賀県議会議員に当選。

昭和三十三年佐賀県農協中央会会長・同拓殖農協連合会会長就任。翌年三十四年佐賀県農民政治連盟創立、会長に就任。既成政党の農政に飽き足らず、農民のための政策を樹立推進しようと旗幟を掲げ、堅い決意の下に発足した。この運動は九州は勿論のこと全国各地で組織化が進められ、昭和三十五年十月全国農政連盟結成。同年

十一月の衆議院議員選挙に佐賀県農政連から立候補した古賀了は、第一位で当選。農政代議士として国会での活躍が期待された。昭和三十五年（一九六〇）国会において首班指名の際「古賀了」に一票を投じた話は後世に残るであろう。一方県経済連の再建、農協中央会の基礎作り、国・県と広範な重責を担った。

昭和四十二年（一九六七）四月、町制施行後初の町長選に立候補し当選。以後四期一六年町政に尽力、その間、町内二農協の合併、圃場整備事業、庁舎建築等の大事業を完成し、昭和五十八年町長を勇退。勲三等瑞宝章、久保田町名誉町民、鑑真和上嘉瀬津上陸記念碑建立発起。全国・県町村会自治功労者受彰。享年九三歳

深川 嘉一郎

文政十二年〜明治三十四年（一八二九〜一九〇二）実業家



久保田村福富の酒造業、古賀文左衛門の長男として出生。二〇歳の頃まで家業の酒造業に従事していたが、後分家して深川の姓に変わり佐賀の道祖元に移り住む。明治三年米商会社を創立。佐賀藩主から汽船「神幸丸」を借り受け、長崎―大阪間の航路を開き、年々発展拡張し、明治十年には大川の若津に支店を設け、遠く航路を海外に拡大し海運業の発展に努める。同十七年には同地に造船所を設立し、海外

航路の船舶を建造するなど、若津の発展に貢献した。

明治二十八年以来、地所会社、セメント会社、種子島・屋久島開発会社等を設立、佐賀の深川として世に名声をとどろかせた人である。大正十三年に架橋された嘉瀬橋は、若津の深川造船所で製作された鉄橋であった。晩

年嗣子文十に家業を譲つて仏門に入った。墓は久保田町中副の圓光院にある。享年七二歳

堤 治之

明治十二年〜昭和八年（一八七八〜一九三三）実業家

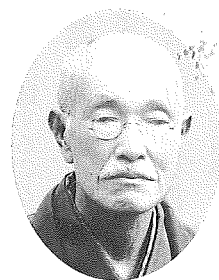


本庄村の内田清秀の三男として出生。久保田村の豪農といわれた、堤善太郎の養子となる。幼い頃から学問を好み郷里の小学校を卒業後、東京の中学校に入学、さらに私立大学の名門校慶応大学に進学、将来を実業界に志しその道を研鑽するため、横浜の日本生糸貿易株式会社に就職した。入社後は自分の才能を発揮し、期待される社員であった。

明治三十三年家庭の事情により同社を退社、帰郷して家業に専念したが、やがてその手腕を認められ地方実業界に活躍することになる。横浜より帰郷したのは地方財界に貢献すると共に、推されて佐賀信託株式会社の取締役役に就任し、同社の発展に尽力した。その後、大正五年七月には、福岡市上土居町に一族を出資者に加え、資本金三〇万円を投じて堤信託株式会社を創立し、自ら社長となり複雑多岐な二大事業の経営を着々とすすめ、九州に信託事業を展開した。その事業の内容は庶民銀行の性質を有する、中産階級以下に必要な一種の金融機関であった。佐賀県下で最も早くこの事業の有望なことに着目し、同志を糾合し創業した斯界の先覚者であり、県内一、二といわれた多額納税者であった。享年五六歳

古賀文一郎

安政六年（昭和二十年）二八五九（一九四五）実業家（酒造業）



久保田町福富の古賀善八の長男として出生。銘酒「窓乃梅」一二代社長。元禄元年（二六八八）初代古賀六右衛門酒造業を創業、古賀家は歴代酒造業を継承し今日に至る。

代々研究熱心で、九代の文左衛門は安政の頃摂津西ノ宮にて七ヶ月余の研究を重ね「西ノ宮土産」なる醸造記録を持ち帰り、酒造の改良に勤めた。

祖先の酒造に対する熱意を受け継いだ文一郎は、明治十一年二〇歳の春、熊本の時計店において、精巧な検温器を発見、酒の醸造過程での温度の作用するところ大なるを発見、従来の施設を改良し独特の温度の計量法を加え在来酒に優る酒を醸造した。度々灘の地を訪れ、精細緻密研鑽を重ねて新しい醸造法を考案した。

数々の研究発表は、九州・県の酒造界の人々の注目するところとなり、選ばれて酒造研究所取締役及び醸造監督という名誉職に推され斯界に貢献した。明治三十三年五二会発展に尽瘁した功により功労賞・銀杯を授与される。同三十九年九州の酒造業の発達・改良に尽力した功により農商務大臣より功労賞・金一封を授与される。明治四十四年特別大演習の際は明治天皇陛下、大正三年には閑院宮殿下御来県に際し、実業功労者として拜謁の榮に浴す。

一四代久保田村長。永里地区に三段余歩の試作田を与え、経営農会の指導をした。会員の建立した鎮徳碑が部落の稲荷神社前にある。墓は中副の圓光院にある。享年八六歳

森山定太郎

明治四年（昭和六年）二八七一（一九三二）実業家（銀行）



久保田村徳方にて資産家森山嘉平の長男として出生。一家は慈善公共の志篤く郷里の人々に敬愛されていた。大正五年（一九一六）九月、同地に金融機関の設備なく不便多きことを察し、その親戚にあたる橋本栄治と提携し、資本金五〇万円を以て株式会社「西肥銀行」を創立す。森山が頭取となり経営基礎を鞏固にすると共に、地方産業の開発に活力を注ぐ。生来純朴で思想頗る穩健、彼の西肥銀行の創業日なお浅きに拘らず地方における信用厚く、業務着実に伸張す、その原因は数々あると思われるが、業務に対する情熱と誠意によるものと思われる。之より先森山・橋本の両氏は各村において貸金業を営んでいたが、時勢の推移にともない四圍の事情が奮起を促し銀行設立に踏み切った。当初佐賀郡久保田村徳方に設置し、その後神埼郡神埼町に支店を、同郡三田川町吉田に出張所を開設した。大正七年六月末現在、支店出張所二カ所、取引先四七カ所を数えた。大正十二年（一九二三）本店を佐賀市松原町に移した。昭和三年四月、百六銀行に合併され、同行も当時住友銀行の経営下にあった。

一八代久保田村長（昭和六年）墓は小路の妙鎮寺にある。享年六〇歳

山崎 時三郎

明治二十年～昭和四十五年（一八八七～一九七〇）実業家



道場では柔道の稽古に励み心身の鍛練に努めた。

一五歳のとき佐賀県庁の給仕として採用された。勤務成績良好で一年たたぬ間に抜擢されて臨時雇いとなる。

月給七円五〇銭、上司井上書記官の書生として松原の屋敷に寄居し、夜は栄城塾で英語を学び、朝は四時起床で大財の漢学の先生の指導をうけ、六時半から官邸の掃除その他の仕事に励み、一七歳で教員の検定試験に合格した。他界した母の残した百円を持って、東京での学究を志し上京した。中学卒業を目指し最短の道を選び四年の三学期に編入試験をうけ合格した。中学校を卒業する迄も学費や下宿代に追われることが多く、アルバイトに奔走したが、人々の厚意に助けられ優秀な成績で日比谷の海城中学校を卒業した。

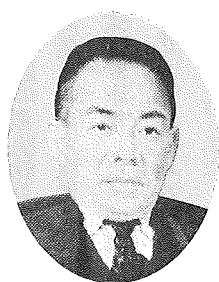
官費で学習出来る学校として海軍兵学校を選び受験したが、身体検査で不合格になった。その後、知人の世話で神埼郡の三瀬小学校で代用教員をした。月給一三円五〇銭。再び上京し鉄道院で働き、生活費は最小限に切り詰め、常に学費を貯えた。明治四十二年の春、念願の長崎高等商業学校に合格した。しかし、学資を稼ぐため長

期休業の間春振の広滝発電所に勤務。長崎では英・数・漢の塾を開き、長崎米穀取引所では土・日・夜と働いた。

広滝発電所勤務の折り上司の計らいで、関東・関西に電気事業視察の機会に恵まれ、東京大学の山川博士との出会いが実現し、大いに見聞を広め、卒業論文は「電気事業経営論」という膨大な論文であった。卒業後、煉瓦製造販売店の会計係として就職、会社の発展に寄与し、博多窯業株式会社として新しく経営形態を改めるに当たり、過去の実績が認められ初代取締役支配人となる。昭和二十八年東洋精機社長、日本ハーダースジュース会長、東京石炭統制株式会社社長。昭和三十六年十一月藍綬褒章を受章。享年八三歳

鶴丸 廣太郎

明治二十三年～昭和十九年（一八九〇～一九四四）実業家（海運業）

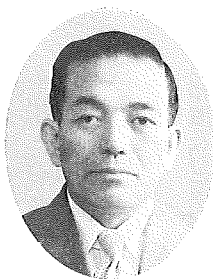


久保田村上恒安の鶴丸安太郎の長男として出生。思斉小学校から青藍高等小学校に進学、この頃から同郷の三学寺住職円盛和尚との交情は年と共に深まり、人生観に大いに影響を受けた。成績もよく師範学校進学を勧められたが、家業である農業に専念した。明治三十九年（一九〇六）一七歳の時一念発起して武雄税務署にはいる。佐賀税務署を最後に、二〇歳の時、苦学を決意し一人上京した。円盛和尚の忠告を振り切ったの上京であったが、生活は苦しかった。福岡県の遠賀税務署長をしている先輩を知り、この人の勧めで再び遠賀税務署に勤務することになった。遠賀税務署は若松にあり、北九州唯一の石炭の積み出し港が控えていた。ここでも広太郎は敏腕をふるい、上司にその才能を認められたが辞して、商事会社、造船会社と発展

し、周囲の人々の信任を得、身軽に働いた。やがて、海運業・造船代理店業の支配人となったが、会社閉鎖の憂き目をみる。無一物から立ち上がって、三人の同志と共に鶴丸商店を開業。懸命の努力が実り、関係業者間の信頼は日毎に増し、鶴丸の名を高めていった。度重なる危機にも遅しく立ち向かい苦難を乗り越え、昭和十年（一九三五）鶴丸は個人経営から株式会社になり、広太郎が社長に就任した。昭和十三年（一九三八）株式会社鶴丸商店は、鶴丸汽船株式会社に改称。昭和十五年（一九四〇）全国機帆船連合会が設立され、初代理事長に鶴丸広太郎が就任した。愛郷心が強く関係の寺社に自分の寄進をしたり、自分を育ててくれた村へのご恩返しと、青年のため武道場を建築寄贈。当時の高森村長に自ら申し出て、村に毎年奨学金を出すことを決め、昭和十八年まで続けた。また、母校の校舎不足を知り小学校の南に校舎一棟四教室を寄贈した。初めて自分の家を持ったのは、昭和十年、小倉市日明に建てた。日明小学校後援会長時代も、校舎一棟の建築費を市に寄付。その外、教育に関する色々な援助を惜しまなかった。昭和十九年（一九四四）太平洋戦争の末期に近い十一月病に倒れた。墓は芦刈町光楽寺にある。第一回海の記念日に通信大臣より感謝状を授与される。若松地区機帆船組合より広太郎の肖像が贈られた。従六位に叙せられる。享年五十五歳

原 田 政 雄

明治三十二年〜昭和二十九年（一八九九〜一九五四）菓子製造業



久保田町徳万（町東）昔の長崎街道添いの菓質屋（菓子製造販売と質屋）の原田卯三の長男として出生。家業の菓子製造は、砂糖菓子・羊羹などで祝儀用の須賀台も作っていた。小学校の頃は清潔を好み、絵の上手な少年であったが手先が器用で、独楽回し等は芸人並みの美技を見せた。

高等科卒業後は家業を手伝い、菓子製造技術の習得や販売に従事した。商売の方も卸売りを止め小売りのみとし、父と共に天秤棒を担いで菓子を売り歩き、厳しい家業に耐えることを学んだ。働き者の父は帰宅してからの売り上げ計算・帳面整理と多忙な一日の繰り返しを見聞し、商人としての経営能力を身につけていった。家での研鑽に満足できず、両親の承諾を得て家を離れ、佐賀市の「曙」をはじめ、長崎の「松翁軒」博多の「風州屋」等一流の店舗を転々として、熱心に修業を重ね、ゆく先々の店で、旺盛な研究態度を称賛された。

大正末期、飯塚への転出を勧められ熟慮のすえ、昭和二年一月、飯塚市住吉町に店舗を開設「千鳥屋」と命名千鳥饅頭を創製、カステラ、丸房露と共に三品専門の店主となったのは二十七歳の春であった。

苦節三〇年、親より伝授された不撓不屈の精神と、もって生まれた商才に一段と磨きをかけ、菓子の品質向上と優れたアイデアによる宣伝等、千鳥饅頭の名声は九州は勿論全国に広まった。

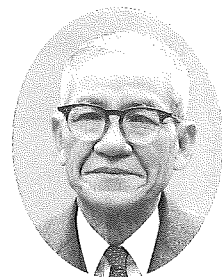
昭和十一年四月、飯塚商工会議所議員に当選、終焉の時まで理事・監事を歴任、商工会を中心に地域社会の発

展に寄与した。

千鳥屋の精選された菓子は、品評会等に出品する度に高く評価された。昭和八年五月、第九回全国菓子品評会に千鳥饅頭を出品、壹等賞金牌受賞。その後毎年開催される全国菓子大博覧会、品評会に優秀な成績を残している。昭和二十九年、京都市で開催された全国菓子博覧会では、名誉大賞牌を授与された。品名カステラ。同年四月、高松宮宣仁親王殿下へ、全国名菓代表として京都「都ホテル」において千鳥饅頭をお手渡し献上の榮に浴した。同年十月十三日他界した。墓碑は久保田町草木田の龍光寺にある。享年五六歳

森 永良次

明治三十七年〜平成四年（一九〇四〜一九九二）建設業



久保田町徳万（町東）、森永半次郎の二男として出生。大正十一年三月旧制佐賀県立小城中学校（現小城高校）卒業と同時に家業の土木建設業に従事、以来五〇余年の長きに亘り、持つて生まれた才能と卓越した事業手腕に、不屈の闘志を持つて、公共事業をはじめ一般工事の完全施工と優秀な業績は衆人の認めるところである。とくに、過去三〇年間に発生した幾多の豪雨災害の発生時には、社の総力を傾注して応急措置及び復旧工事に命懸けで奮闘努力し、会社の利益を度外視した完全施工により民生安定、地域開発に寄与した。主な工事は得仏橋・敵木ダム工事用道路・城内公園等。

昭和二十四年佐賀県建設業協会が発足して以来、評議員・理事を歴任、後には副会長として職務に専念、建設

業者の資質の向上、会員相互の融和と協力を強調し、業界発展のため尽瘁した業績が認められ、昭和三十五年黄綬褒章受賞、昭和五十年春の叙勲において、建設功労者として勲五等瑞宝章に輝いた。享年八八歳

堤 善六

明治十三年〜昭和三十九年（一八八〇〜一九六四）製瓦業



久保田村大字久富北田で製瓦業を営む堤乙吉の長男として出生。小学校の成績優秀で、当時としては数少ない進学を希望し、昭和二十七年佐賀県立佐賀中学校（現佐賀西高校）に入学。勉学に励んでいたが、学業半ば病気のため退学し、療養ののち家業の製瓦業に従事した。

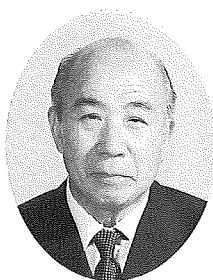
明治三十三年、輜重兵第一二大隊に入隊。退役後日露戦争に出征、戦功により勲八等白色桐葉章に輝く。その後釜山、鎮海湾において船舶荷受問屋および米穀問屋を営み、傍ら瓦その他建築材料の販売をする。帰郷して大正六年推されて村会議員となる。以来三期連続議員を務め、政治的手腕を評価された。この間、大牟田市に於いて肥筑物産株式会社販売主任として就職。また肥筑窯業会社監査役、久保田商工運輸会社取締役および専務取締役、八阪九商計算会社監査役などに選任される。大正十五年五月、佐賀米穀取引員を認可され、佐賀市赤松町に於いて仲買店を開業。

製瓦事業は、明治七年の創業で九州でも老舗として、県内外に知られていた。大正八、九年頃の製造高は年間一五〇万枚、売上高は当時の金で一二万円にもなった。瓦の取引所は県内は勿論、長崎・熊本各県、福岡県の

門司・小倉・戸畑・八幡など、遠くは朝鮮半島の釜山、馬山、群山、木浦などまで取引をし繁忙を極めた。

明治四十四年、福岡県地方大演習の際に明治天皇陛下の拜謁の榮に浴した。九州、沖繩八県連合共進会その他の博覧会、共進会において銀牌・銅牌などを受賞す。石炭・コークスの販売も兼業とした。享年八五歳

千々岩 健六
明治三十一年～昭和五十二年（一八九八～一九七七） 鉄工業



久保田町北田において、鉄工場を営む父梅太郎の二男として出生。父梅太郎は商魂逞しく明治三十五年（一九〇二）に福岡県豊前炭坑の傍らに鑄物工場を始め、明治四十一年（一九〇八）久保田駅前に移転、工場を再開するが事故により早逝した。健六は二十歳の若さで家業を継ぎ、叔父（忠次・熊六）が後見した。経営は順調で、大正十二年の工業年鑑佐賀欄には、唐津の黒木、佐賀の真崎・千々岩鉄工場のみが記載されている。主な製品は炭坑機器、石油発動機、船舶部品（長崎造船所納品）などであった。大正十一年西肥板紙株式会社設立時は、同工場の機械製作・据付けに活躍した。太平洋戦争中は、航空機部品（ジュラルミン製）手榴弾等を製作し、軍需産業の一翼を担った。主な得意先は佐賀板紙・小城炭坑・岩屋炭坑であったが、昭和四十九年に廃業した。昭和二十六年村会議員に当選。妻キサとの間に五男二女の子宝に恵まれ、いずれも英才教育の道を歩ませ、小学校五年から旧制佐賀県立小城中学校（現小城高校）へ進学させた。長男健児は東京大学教授・日本機械学会会長・千葉工業大学教授を歴任、他の兄弟も国・県・大手会社の要職につき活躍する。本家は三男の三次が継ぐ。墓は三日月町の勝嚴寺にある。享年七九歳

は三男の三次が継ぐ。墓は三日月町の勝嚴寺にある。享年七九歳

近藤 末
（旧姓 田中） 明治三十七年～昭和六十三年（一九〇四～一九八八） 看護婦



久保田町永里において、田中房吉の六女として出生。久保田村立思斉尋常高等小学校を卒業後、久保田村立実科女学校に入学、中途より日本赤十字社看護看護婦を志し、大正十三年（一九二四）資格取得、広島・下関陸軍病院に勤務。昭和四年から三年間、佐賀県師範学校付属小学校勤務、学童の保健・体位の向上に尽力した。満州事変勃発により、選ばれて日本赤十字社臨時救護班要員として召集され、龍山陸軍病院・会寧陸軍病院に勤務、戦傷病者の看護に当たる。戦争の悲惨な情景に胸を打たれ、救護班解散直後『銃後に叫ぶ』という戦争体験記を発刊、国民の心構えに警鐘を鳴らす。日本赤十字社山口支部病院総婦長兼講師を務める。

懇望されて、日本赤十字社朝鮮本部病院の総婦長・講師として京城に赴任。寄宿舎の舎監として看護婦の監督に当たり、生徒の教育に専念した。特に、朝鮮人と日本人との融和に努力し、院外で婦人会の講師として活躍した。日中戦争が厳しさを増す中で、戦地將兵の苦難を思い戦地勤務を熱望。日本赤十字社の推薦により陸軍直属として大陸に渡り、昭和十四年（一九三九）上海兵站病院看護婦長として活躍。昼間は傷病兵看護に奔走し、夜は『陣中看護記』の執筆に夜を徹し、昭和二十年（一九四五）一月、日本赤十字社推薦図書として五千部が発行

された。戦後の著書に『新日本の黎明―衛生日本建設のために―』、『涙の看護日記五十年』（日赤教え子たちの比島敗走秘話）がある。復員後は郷土の久保田町立思斉中学校に養護教諭として奉職。財団法人児童福祉施設めぐみ園理事十年。晩年良縁に恵まれ佐世保市に住む。享年八三歳

下平 マサ

明治二十五年～昭和五十一年（二八九二～一九七六）助産婦

杵島郡橋村大字大日の大木徳二の四女として出生。下平多作と結婚。



明治四十四年十月、久保田町徳万（町西）において助産婦を開業。以来五〇余年の長きに亘り助産介助に従事し、こどもの取り上げ件数は一万数千件に及ぶ。最近では自宅分娩をする女性ほとんどないが、昭和四十年代までは自宅分娩がほとんどで、衛生知識にも乏しかった当時は、母性の健康管理から育児指導に至るまで、助産を通じて衛生思想の向上に尽力した。昭和二十八年受胎調節実施指導員の資格を取得し、当地区域の家族計画推進のため昼夜を分かたず指導にあたり、とくに久保田干拓入植者の八〇世帯の指導にあたっては、交通機関もない地域で、連日愛用の自転車で行った道の程を通い指導に専念した。

昭和十年から佐賀南部地区助産婦会支部長として、永年に亘り会の運営・後進者の育成指導に努められた功績が認められ、厚生功労者として勲六等宝冠章に叙せられた。夫多作も昭和四十六年自治功労者として叙勲を受ける。夫婦揃っての叙勲は稀である。享年八四歳

高柳 快堂

文政七年～明治四十二年（一八二四～一九〇九）画家



久保田村の元小路の八田盛章の三男として出生。高柳権太郎の養子となる。外務大臣であった本野一郎の叔父である。通称文次、別名高致。鹿瀬老漁人、窪水漁夫と号す。佐賀の武富圀南に漢学・画法を学び、長崎の僧釈鉄翁に南画を学ぶ。また大阪の篠崎小竹および

岡田天州に師事詩文を修め、後また中村竹洞・田能村直人に師事、心技ともに深まり南画の名家として並ぶ者が無かった。快堂は当時有田の白川に居住し、子弟の教育に勤める傍ら陶画を描き、山水・草花の妙を極めた。その頃、黒牟田製四尺の巨鉢に画いた染め付け龍虎は、筆力雄渾の名作と称賛された。明治三十三年皇太子殿下佐賀行啓の際、御前揮毫の光栄に浴した。また、京都南画学校の副校長を勤める。（長男豊三郎は名古屋商業学校長、後三代読売新聞社長となる。）享年八五歳

遠田階贍

弘化二年（昭和二年）（一八四五〜一九二七）宗教家



岐阜県美濃加茂市福田の広瀬清藏の四男として出生。七歳の時大阪府岸和田市の泉光寺住職鳳山和尚のところで得度。その後佐賀県小城郡小城町岩松の妙鏡院、天繼院、四国徳島の慈光寺と転々と修行を積み同寺の陽開禪師は僧としての才能が高く評価した。文久三年久留米の梅林寺の羅山禪師の下で修行すること数年、更に故郷に近い岐阜の正眼寺の雪澤禪師の下へと修行三昧に明け暮れた。

明治十一年五月、佐賀県久保田村の寿昌寺より請われ、遠田と姓を改め住職として仏道に精進し、寺の本堂・庫裏の再建など檀徒と共に寺門の興隆に献身した。道義に厚く請われるままに本山の参事職を務めること三回、地方取締役一九年、住職三三年の永きに亘る。明治四十三年三月住職を退職。その後も請われて関係寺院の再興や布教活動に尽力した。享年八三歳

力久辰齋

明治三十九年（昭和五十二年）（一九〇六〜一九七七）宗教家



久保田町大立野東、力久辰三郎の二男として同地にて出生。父辰三郎は初め漁業を営んでいたが、のち宗教家として活躍した。当時日本で数少ない霊能透視の大家となり、韓国にまで名を知られる大千里眼であった。辰齋は若い頃神戸で電車の運転士や税務署勤めをしていた。父の他界後、昭和元年二〇歳のとき初めて宗教的立志を決意する。その後二〇年、独学・独歩・修学・修行を続け、昭和二十二年多

市筋原の山上に善隣会を立教、瑞鳳園精神修養道場―天地公道善隣会を立教。その間、昭和九年の文部省主催の全国宗教会議に、神道実行教九州代表として出席、東京日比谷市政会館の大講堂には、神道・仏教その他諸教団の代表が参加、発言された内容は戦時体制下の国策に関するもので宗教本来の問題ではなかったため、最終日に緊急発言のかたちで「救世宣言」をした。

善隣会は後善隣教に改称されるが、神道と天台仏教が習合した考えかたで、行を重視するが、その一つに「百日千里の行」が代表的行で、生家を起点に久保田の香椎神社、天山神社、清水の観音の三社に参り、生家に帰る着くのは日暮れ時である。この行を百日続けるのは可成の難行である。

善隣教は昭和二十七年七月二十九日、宗教法人「天地公道善隣会」となり、辰三郎を道祖、辰齋を教祖と称し、現在は教主から継主へと続いている。信徒は九州・四国を始め、関東以西各地に散在し、アメリカにも支部がある。

聖堂のある善隣の園は、福岡県筑紫野市原田にある。享年七〇歳

中島松二郎

明治八年〜昭和三十三年（一八七五〜一九五八）社会教育者



久保田村久富の中島松右衛門の長男として出生。

若い頃から英才の誉れ高く、俊敏で数理に明るく外柔内剛意志堅固、熟慮断行の人で、人に接しては必ず説得心服させる人徳を備えていた。藩の塾で漢学を学び、聖賢の道を会得し人の和則ち勸戒和平の基なりという信条を以て、ひたすらに地域社会の安寧と繁栄のために一心を傾け、日賣きによる蓄財法を考案したのは弱冠二

五歳の時であった。当時約百三〇余戸の久富部落は村内最下位の貧弱な生活状況で、特に漁民は困苦その極に達し世相は賭博鬪鷄等の悪風習跡を断たず。この更生の改善策は貯蓄奨励と飯米の確保に在りと、先輩諸兄と諮り東奔西走全戸加入が実現した。各戸日々一銭を貯金し必要に応じ組合員に貸し付け、借りやすく知らぬ間に返済できる社会共済金融機関である。貯蓄心が高まり悪習も自ら追放し一躍模範部落に変わった。昭和十三年干拓地完成と共に二四町歩の美田を取得し各戸に配布し、いわゆる半年飯米確保の目標を達成した。大正五年推されて村会議員となり二六年間、自治教育に尽瘁した。産業組合の設立と共に専務理事となり、その発展に寄与す。久保田搦耕地整理組合の発起人となり、完成に至るまで献身的に奔走した。中島松二郎翁頌徳碑は久富の御髪社境内にある。墓は久富の寿慶寺にある。享年八四歳

内田常吉郎

不詳〜明治四十二年（不詳〜一九〇九）教育者

久保田町内田喜右エ門の長男として出生。青少年教育に情熱を傾注した人である。

佐賀市水ヶ江にあった干城社は、明治十八年干城学校となり、陸軍士官学校の進学予備校であったが、内田常吉郎は同校の英語教師であった。明治二十九年、佐賀市与賀町一二七番地に必習学館を設立、中学校・実業校進学希望者の予備校であった。学習内容は、読書・算数・作文・習字・漢文・英語・倫理で修業年限は一年で、生徒数は一〇〇人ほど、館主・館長も常吉郎であった。明治四十二年、常吉郎逝去のため廃校。その後弟の内田清一は、社会の進運に伴い女子教育の発展の必要を強調し、県知事の認可を得て同地に佐賀実科女学校を設立した。大正七年（一九一八）には文部省認可の佐賀実科高等女学校となり、大正十二年七月現在の教員数二八名、生徒数三七〇名。大正十三年四月、文部省認可の高等女学校となり、清和高等女学校として発足した。校主は内田清一、校長中島善之であった。

原田千之

大正四年〜大正八年（一九一五〜一九一九）勤務期間 教育者



西松浦郡西山代村大字久原の出身で、西松浦郡視学等を勤めた。

その当時、最も残念に思ったのは、西松浦郡小学校教育界で師範学校入学者の少ないことで、とくに女子は二年に一人位であった。そのため佐賀・小城方面から年々任用はされるが、長く留まらず、日々の授業に熱意が欠け遺憾な点が多かった。そこで、その救済策として、師範学校入学者の卵とも言うべき、尋常科準教員養成所設立の急務を思付いたが、当時いずれの郡にも該当施設はなく、郡会に発案しても賛成を得ることが出来ず、生徒からの月謝で囑託教員三名を置いて開設した。入学者は各小学校の高等科卒業生より男女四〇人の生徒を集め就業年限は一年で、県庁では修業生には無試験で尋常小学校準教員の資格を与えたとの了解ができ、郡内教職員の補充難を緩和することができた。それは明治四十三年の四月のことであった。

思斉尋常高等小学校校長、僅か四年の勤務であったが、「動的教育」という新教育方法を徹底させた。つまりドリトンプランの日本版というべきものであった。自主性・主体性を育てる、積極的なグループ学習の形態であった。辞書を使わせ、予習を重視し、生徒にディスカッション（討論）を盛んに行わせ、教師はこれを指導する。常に問題を持ち、質問・討論し問題を解決する雰囲気を作り上げた。原田校長の講話は、用意周到で原稿は巻紙に筆で書き、しかも朗読ではなく、威厳があり説得力のある話し方であった。久保田に偉大な影響を与えた校長であった。当時の思斉校は県内外からの学校視察が絶え間ないほどであった。当時の村長石川又八は、教育の

重要性を説き、特に女子教育艱教育が大事であることを強調し、大正三年（一九一四）久保田村立実科女学校を設立、初代校長は原田千之であった。

志津田 藤四郎

明治三十三年〜昭和六十二年（一九〇〇〜一九八七）教育者

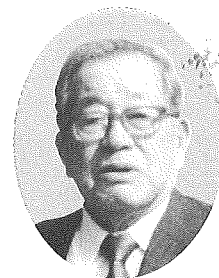


久保田町大立野東、志津田富太郎の四男として出生。父は宗教家であったので、子弟の教育は厳格であった。小学校は横江の久保田第二尋常小学校に入学、低学年の頃は奔放な学校生活であったが、学究的な教師との出会いから学業に興味を持ち、一年後には全教科揃って優秀な成績を修める迄になった。高等科は元小路の思斉尋常高等小学校に入学。学校の夏・冬の長期休暇には、アルバイトで貯めた学費で佐

賀の塾の先生の元に通い、中学校（旧制）の数学・英語を勉強するなど、他の生徒の知らないことまで学ぶことができた。高等科の卒業を前にして、担任の教師が父親と本人に師範学校入学受験を勧め、師範学校入学が実現した。卒業後江北小学校へ赴任その後さらに日本大学高等師範を卒業し、教師としての最高学府を極めた。卒業後は鹿島中学校（旧制）母校佐賀県師範学校で後輩の指導にあたり、佐賀大学合併後は付属中学校総務に転出。佐賀竜谷短大教授、のち同校副学長。剣道三段佐賀の方言や俗言の研究者で、著書に『佐賀の方言』などがある。享年八七歳

井上正喜

大正二年〜平成五年（一九二二〜一九九三）教育者

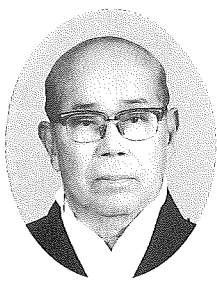


福岡県朝倉郡朝倉町比良松の井上亀次郎の三男として出生。郷里の小学校を卒業、朝倉中学校（旧制）に進学、スポーツを好み向学の志篤く、中学校の体育教師を目指し東京高等師範学校体育科に入学、特にバレーボールの部員として活躍鮮やかなボールさばきで、度々チームの勝利に貢献した。

卒業後、尾道中学校に赴任したが、間もなく兵役に服することになり学校を離れた。帰還後の昭和十六年七月、佐賀県立女子師範学校教諭を命ぜられ佐賀に赴任、良縁に恵まれ佐賀に永住を決意する。のち妻の里である久保田町徳方に家を構えた。戦後の学制改革にともない佐賀大学が開設され、教育学部教授として学生の指導にあたる。その間、バレーボール協会の育成指導に情熱を燃やし、県バレーボール協会会長に推挙され、学校教育・社会体育の両面に、その手腕を発揮した。特に、婦人の健康と楽しい触れ合いを目的に、ママさんバレーを発足させ、県内全市町村に普及させた功績は極めて顕著である。定年退職後も、福岡教育大学に招かれ三年間に亘り学生の指導にあたる。土曜、日曜も暇さえあれば、バレーボールの指導に奔走した。従三位勲三等旭日中綬章が贈られた。享年八一歳

石丸正光

大正三年〜平成十年（一九一四〜一九九八）教育者



久保田町徳間において石丸龍応の二男として出生。家は日蓮宗の寺であった。家族の勧めもあり自らも、宗教家への道に精進し、学校も立正大学史学科に進学、卒業後の昭和十二年東京都大森区役所の教育課に勤務する。

昭和二十七年、佐賀に帰り県立白石高等学校をはじめ、各高等学校に勤務。昭和三十八年佐賀工業高等学校教頭の頃、校舎建設および生徒指導など学校の発展に尽力した功績が認められ、校長・同窓会より感謝状が贈られた。

昭和四十五年四月、県立ろう学校長に昇進、九州初の幼稚部を新設。佐賀農芸高等学校長（現高志館高校）を最後に定年退職した。（六〇歳）教育功労表彰受賞（佐賀県教育委員会）

昭和二十九年一月、地域の要望にこたえ私立久保田幼稚園を開設、寺の本堂と庫裏を仮園舎として開園、定員八〇名、五歳児二学級。同年佐賀県知事幼稚園設置認可、年内に園舎建設工事完了、定員二二〇名、四学級。

昭和五十六年、学校法人慈光学園設立認可、理事長石丸正光、久保田幼稚園長石丸正子。昭和六十一年十二月新園舎竣工、県下に誇る近代的な園舎として各方面からの注目を集め、仏教の心を中心にした幼稚園教育の理想実現に向かって、教育環境が整備された。平成十年九月、創立四五周年記念像建立および記念式典を挙行。同年十月逝去。

本野の盛亨

天保七年〜明治四十二年（一八三六〜一九〇九）新聞社社長・官吏



安 峻と長崎出身の柴田昌吉とともに創立する。同七年には三人で、読売新聞社を創業。子安が初代社長をつとめたあと、同二十二年に二代目社長に本野盛亨が就任した。本野盛亨社長は、就任の挨拶に「新聞の編集には口を出さず、すっかり委せるが、ただ新聞の記事のために泣く人や恨む人を作りたくない。いくら新聞が売れなくとも、個人の私事を暴くことだけは絶対に差し控えて欲しい」と述べている。その人柄をうかがい知る事ができる。三代目は甥の高柳豊三郎が社長となった。高柳は、明治四十五年二月に没し、四代目には本野盛亨の二男である本野英吉郎が社長に就任し大正八年までは、本野家が読売新聞社の実権を握っていた。寺内内閣の外務大臣本野一郎は盛亨の長男である。本野家の墓は本町草木田の寶琳寺にある。正三位勲五等 享年七四歳

中尾都昭

明治二十七年〜昭和五十五年（一八九四〜一九八〇）新聞社社長



久保田村久富の網元中尾清三郎の二男として出生、幼名を伊八。母チヨの厳しい躾の下で逞しく成長、愛すべき大将であった。新田尋常小学校を卒業（四年制）青藍高等小学校に進学。同校を明治十三年三月卒業漁師の家業を継ぐ。一八歳で海軍志願、佐世保海兵団に入団やがて第一次世界大戦に従軍、功により勲八等瑞宝章と従軍記章を授与された。大正七年（一九一八）海軍を退役。佐賀に帰り肥前日日新聞（政友会機関紙）の営業に携わる。大正十五年（一九二六）佐賀市松原町新馬場の片田江通りに於いて農村青年新聞を発行、新聞経営をはじめた。翌年同紙を「佐賀自由新聞」（毎週日曜刊行）と改題、同紙五周年記念で、同市県庁通りに新社屋を完成、昭和六年（一九三二）七月、念願の日刊紙「佐賀毎夕新聞」を創刊した。昭和十三年（一九三八）、経営難の「佐賀新聞」を買収、一時、国策で「佐賀日日新聞」と合併、「佐賀合同新聞」となったが、昭和十七年（一九四二）再び「佐賀新聞」に改題、唯一の郷土紙としての地歩を築き上げた。昭和五十四年（一九七九）八月、社長の座を長男清澄に譲り会長に就任。佐賀観光協会会長、佐賀観光連盟会長、佐賀整肢学園理事長、佐賀竜谷学園後援会長、佐賀善意銀行頭取、県自然公園審議会議長、県ユースホステル協会会長、共同通信社監事、佐賀国体・佐賀医大設置募金委員長。信条「他力本願」「至誠無敵」著書に『わが生涯』がある。紺綬褒章受章（三回）昭和四十七年（一九七二）勲三等瑞宝章。昭和四十九年（一九七四）久保田町名誉町民第一号となる。中尾都昭頌徳碑は久富の御髪社境内に建立、役場前に胸像がある。墓は同寿慶寺にある。享年八六歳

千葉胤明

元治元年～昭和二十八年（一八六四～一九五三）歌人



墓碑は久保田町福所にある彦隆山安養寺西持院（天台宗）の墓地にある。享年九〇歳

佐賀郡久保田町出身の歌人。父は桂園派歌人、賢隆坊千葉元祐。高崎正風に歌文を学び明治二十五年（一八九二）御歌所録事となる。明治四十年（一九〇七）常勤寄人。御歌会始め奉行など明治・大正・昭和の三代を勤め、御歌所廃止後は宮内庁御用掛。書家としても有名で、有明子、春翠などと号した。旧帝国芸術院会員。歌、野辺の月「虫の声おくりむかへてわが影を月にふみゆく野辺のほそみち」従三位。

古賀残星

明治三十六年～昭和四十三年（一九〇三～一九六八）文学者



は田原輝夫、目次絵は山口孝行と豪華な顔触れであった。大正十四年東京高等師範学校体育科に進学、卒業後は

久保田町副の花火師、古賀伊作の長男として出生。本名は又作、思斉小学校卒業後、佐賀師範学校へ進学。柔道部で活躍、文学を嗜み文武両道を志した人である。

大正十三年同校卒業、東松浦郡切木小学校に赴任、教職の傍ら詩を中心とした総合文芸同人誌『牧人』を創刊。県内の青年文学者は勿論、小川未明・宮地嘉六・福原麟太郎・中島哀浪など全国的に有名な作家も投稿した。表紙絵は山口亮一、扉絵

新潟県中蒲原郡村松町の県立村松中学校（旧制）に体育科教師として奉職、特に柔道の指導に尽力した。辞して東京に戻り、学校柔道の啓発・社会柔道の論評に健筆をふるい、全国を巡回し柔道の普及に努める。『講道館今昔物語』『黒帯の青春』『嘉納治五郎』など著書も多く、代表作に小説『天才永岡十段』―和して流れず―がある。この小説は昭和二十九年六月、『柔道物語』というNHKの放送番組で三回に亘り放送された。本は同年十一月に東京の春歩堂から発刊された。郷里久保田を愛し、思斉小学校の校歌は残星が作詞した。詩集『空に翳す』『煙』等があり、教育文化に貢献した。昭和四十二年求められて富士町史に「掘り出した宝石」という一文を掲載した。翌年の十月、古賀残星は病に倒れた。講道館七段を追贈される。享年六五歳

鍵山栄

明治三十八年～昭和六十三年（一九〇五～一九八八）医師



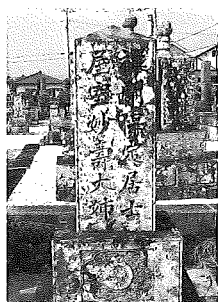
久保田村の開業医鍵山俊八の六男として誕生。旧姓佐賀高等学校を経て、昭和五年三月長崎医科大学を卒業、引き続き同大学助手として勤務。その後佐賀県庁に奉職、昭和十三年唐津保健所長時代は、管轄する山間僻地・離島の農漁村で、劣悪な医療施設を巡り困窮する住民の治療・健康保持と予防指導に尽瘁、県を始め多くの人に評価された。昭和二十一年郷里で開業、公立の小・中学校校医として地域医療

に貢献した。昭和十年医学博士（長崎医科大学）日夜多忙な施療の傍ら、佐賀県医学界の古医学史と近代医学の進歩の跡を究明、古医学史を執筆した。その主なものは、『相良知安』昭和四十八年。『佐賀の蘭学者たち』昭和

五十一年。『佐賀医療百年』昭和五十四年。『種痘物語』昭和五十六年。日本医師会最高優功賞・栗原荒野賞等を受賞。その後、佐賀市鍋島町森田に移転開業。従六位。享年八三歳

江口保定

天保十一年～明治三十八年（一八四〇～一九〇五）医師



久保田邑主の侍医で名医の一人に数えられた。『好生館史』によれば明治二年（一八六九）二月、指南役差次に任命される。好生館は、古賀毅堂が鍋島斉正に医学教育の重要性を説き、天保五年八幡小路に医学館を試設、安政五年に医学館を設立。指導方差次・指南役・指南役差次をおき蘭学を勧め、医学寮を「好生館」と改称。明治二年郡部地方に医学会議所が一カ所建てられ、同十二年郡立佐賀病院が設立される。

江口保定は院長心得を命ぜられる。梅定を保定と改める。

早くから好生館にて蘭学を修め、後長崎に遊学しボードウィン、マンズヘルドの両師につきて技術を研ぎ、たちまち頭角を現し、その塾長となり在学数年にして学業を終える。帰宅し村田氏の侍医となるが、明治四年好生館教諭院長を拝命する。職を辞した後、佐賀市八幡小路に住す。性寡欲また顕達を求めず、権門富貴に屈せず。門下生数十の医師を出す。明治三十九年（一九〇六）四月、宮永常吉、古川豊太郎等一〇名の門人の発起により墓碑銘が建立された。撰文は従三位徳久恒範、書は中林和（書聖といわれた中林梧竹）墓及び墓碑銘は、邑主の

菩提寺大雲寺にある。享年六五歳

大坪虎三郎

明治二十年～昭和四十九年（一八八七～一九七四）医師



久保田町久保田宿の大坪浅吉の長男として出生。久保田村立思斎小学校を卒業し、旧制小城中学校（現在の小城高等学校）に進学。久保田宿小城中間を、毎日徒歩で通学し、心身共に強健で努力家だった。卒業と同時に長崎医科専門学校に進学、医学の道を志した。卒業後は牛津の西町に医院を開業したが、その後、妻の実家から招かれて、熊本県の人吉に移り、関係の医師三人で協力し球磨病院を開設、地方医療の改善・向上に尽力した。なお、旺盛な研究心は国内に止まる事無く、アメリカでの研究を切望し、許されてシカゴ大学の留学生として三年間、内科の呼吸器を中心に研究に専念。帰朝後、久保田宿の祇園社境内で、来賓・親族・宿関係者多数参列の中で、帰朝報告並びに祝賀園遊会が盛大に開催された。更に大正十二年、慶応大医学部に二年間研究生として席をおき、専門研究分野である呼吸器の病理、特に当時治療極めて困難と云われていた「肺結核」についての研究に精魂を傾注し、書き上げた論文が認められ医学博士の称号を授与された。久保田町における医学博士の第一号といわれている。

久保田町の人物

昭和の初期、佐世保市に於いて医院を開業し、戦時体制下の市民の医療に努め、推されて市の医師会会長に就任。医師会の発展、医学の進歩向上、医療業務の改善に尽力したが、戦争激化に伴い開業困難となり再び人吉市

の球磨病院へ戻り医療を続ける。享年八七歳

鶴丸 廣長

大正三年〜昭和六十三年（一九一四〜一九八八）医師



久保田町徳万（町東）の鶴丸広太郎の孫。父は、佐賀市水ヶ江四丁目で産婦人科を開業する。医師鶴丸保一の長男として、大正三年十二月六日出生。

旧制佐賀中学校（現佐賀西高校）に学び、のち熊本の高を卒業、九州帝国大学医学部に進学、医師としての道を歩くことになった。卒業後は、医学部の第二外科に所属外科医としての研究に努める。昭和十三年久留米四八聯隊入隊陸軍軍医中尉

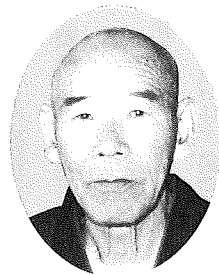
（現役・退役・臨時召集）下関・福岡の部隊と陸軍病院を兼務し内地勤務ではあつたが多忙を極めた。昭和二十年八月六日広島原爆投下後、派遣されて負傷者の治療に奔走した。

戦後、九州大学における捕虜飛行士八人の生体解剖事件の疑惑を受け、無実が判明するまで大変な苦勞をし、遠藤周作の小説「海と毒薬」のモデルとなった。昭和二十七年請われて佐賀県立病院好生館外科部長兼皮膚科泌尿器科部長に就任。県では県立病院好生館館長の後任人事が進められていたが、鍋島知事は、三十八歳の鶴丸廣長を指名、好生館の将来を託した。昭和二十八年十月館長就任後は、数回にわたる建造物の増改築、医療機器の改善、病院運営の近代化など時代に即応する県立病院として発展させた。佐賀県民が熱望した佐賀医科大学の誘致活動に尽力、開学後は大学参与として佐賀医科大学の運営に参画する。その間、佐賀県立高等看護学院長、佐

賀県衛生専門学院院長を兼務。佐賀県医師会常任理事、佐賀整肢学園理事、全国自治体病院協議会監事、佐賀県優生保護委員、佐賀県医療機関整備審議会委員、九州がん研究会幹事。陸軍軍医少佐。医学博士。昭和五十四年藍綬褒章。従三位勲三等瑞宝章。墓は元小路の大雲寺にある。享年七二歳

原田 與吉

明治十八年〜昭和二十七年（一八八五〜一九六二）技能士（樽製造）



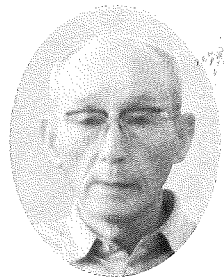
福岡県瀬高市にて富安次吉の三男として出生。縁あつて久保田村快万の原田カメと養子縁組をし、原田製樽所を開業。明治四十三年、窓乃梅酒造指定工場となる。

初めは熊本の肥後材を使用した。後色白の吉野杉を材料とした。樽の材料を売る樽丸商が九州に居ないので、奈良県の桜井・吉野から取り寄せた。現在の仕入先は奈良県の吉野、福岡県の吉井・田主丸である。太平洋戦争で長男竹次、二男善次と

二人の戦死者を出した原田家では、三男の参次が昭和二十一年家業に就業、昭和二十六年家業を引継ぎ二代目となる。昭和五十九年五月、有限会社原田製樽所となる。平成九年優秀技能者として佐賀県知事表彰を受賞。「現代の匠」としてテレビ新聞などで度々報道された。平成十年、参次の長男泰行が三代目として家業を引き継ぐ。創立当時は窓乃梅の指定工場として発足したが、その後天山・枝梅・高砂・千代雀と取引先を広め、現在は佐賀・福岡・熊本の九州一円、広島・奈良・東京都・秋田・石川と全国に販路をひろげている。享年七六歳

古賀 朋吉

明治四十五年〜平成九年（一九二二〜一九九七）技能士（石工）



涅槃像である。宗教心に厚く齋戒沐浴して彫像に取り組んだ。

昭和二十七年五月、岸嶽城址西八八カ所の開設に当たり、仏像彫刻に精進した功績に対し、真言宗管長より「梧舟」の称号と、表彰状が贈られた。同年十一月、日蓮上人開宗七〇〇年慶賀記念事業に宗祖の石像に専念した功績に対し、観照院権僧正より表彰を受ける。第二四回建築士会全国大会では、伝統文化の発展に寄与した功績を称え、日本建築士会連合会より表彰を受けた。販路は県内から鹿児島・広島までに及んだ。享年八四歳

※ 久保田町史の人物編については、調査研究・資料収集など不十分で、これ以外の方についても取り上げるべき人材が多かったことと推察されます。限られたページで他の方々は割愛させていただきましたことを深くお詫びいたします。

十 久保田町の将来像

久保田町は、佐賀平野の中央に位置し、恵まれた立地条件と自然環境のもとで、農業を主産業として自然と人の生活が調和した、美しい町として発展を遂げてきた。この水と緑に囲まれた豊かな自然環境を育みながら二一世紀を、いきがいを感じ、心から住んで良かったと思えるような、久保田町ならではの個性的な町づくりを展開していかねばならない。

近年、情報化、高齢化、国際化、都市化等、社会情勢は大きく変動している。特に今日的な重要課題として個人や国の安全保障の問題や世界的経済不況の問題がクローズアップされてきた。このような厳しい変動のなかで、久保田町民の英知を結集し、強固な連帯意識と温もりのある豊かな心で、田園文化都市としての未来の創造に向かいビジョンを展開し、町の活性化を進めるため、平成八年三月第四次久保田町総合計画を策定した。

本町が目指す将来像『太陽とみどりの町』に向け、自然や歴史・文化を大切にし、活力に満ちた魅力ある産業の振興、健康でやすらぎと思いやりあふれる福祉の町、心豊かな知性と創造性を育む教育の振興など、各般にわたり二一世紀にはばたく久保田町の実現を進めたい。

久保田町の将来像

第四次総合計画の目標年次である平成十七年までの一〇年間の計画期間になすべき政策を示すに当たり、本町が有する自然・歴史・社会・経済的諸条件を生かし、県が推進している『住みたい県日本一』と相まって、将来